

本当の優しさ

橋本市立紀見北中学校 3年 平田 実

「実は私、障がい者なの。」

突然そう言われた時、あなたはその人にどんな言葉をかけますか。

私は小学六年生の頃でしょうか。当時私はマンションに住んでいて、登校中のエレベーターでよく会う女性がいました。その女性はいつも白いつえを持ち歩き、サングラスをかけていたのです。少し前に障がいについての授業があったので、私は聞かずとも視覚障がい者の人だと分かっていました。ある日、私と女性がエレベーターに乗っていた時、途中の階でドアが開き、小学二年生くらいの女の子が乗ってきました。すると、女性のサングラスを見て、

「お姉さん、今日はくもりなのになんでサングラスなんかかけてるの？」

と不思議そうに聞いたのです。その時、私はとっさに

「ちょっと、失礼だよ。」

と女の子に言ってしまいました。女性は少し驚きつつも、優しい声で女の子の質問にこう答えたのです。

「私、目がよく見えなくてね。不安な時があったらこれをつけて心を落ちつかせているの。」

はっきりと顔がよく見えなくても、女性が優しく笑っていることが感じ取れました。

そんな出来事から数年経ち、私があるとある動画サイトを見ていた時に、フランスの団体が行った実験動画を見つけました。その内容とは、間にしきりがあるいす二つに親子が座り、互いの姿が見えない状態で前方のスクリーンに映る動画の人物の顔真似をするというものです。初めは親子どちらもスクリーンの人物の変顔を真似します。しかし、映像は途中で「健常者が作る変な顔」から「知的障がいを持つ人が作る変な顔」に変わったのです。すると、先ほどと同じように顔真似をする子供と違い、親は顔真似をやめてしまいました。これは大人が「障がい者は哀れむべき存在だ」という無意識な偏見を持っていることを証明する実験なのです。私はこの動画を見て、あの時私が女の子に「失礼だ」と言ったのは、私に偏見の心があったからだと気付きました。

ですが私は、無意識に偏見を持つことが悪いとは思いません。なぜなら、それも障がい者への優しさだと考えているからです。年を重ねていくごとに、色々な社会を知ってしまった私達には、障がい者という言葉に敏感になることは仕方がなく、そんな中で障がいを持つ人に、良くも悪くも特別な感情を抱くことはおかしくありません。しかし、時には子供のような純粋な心で接するべきではないでしょうか。障がい者にとっては、健常者と障がい者で区別されてしまう方がずっと苦しいと思います。だから、障がいという概念を捨てて、全ての人に平等に接することも必要だと私は考えます。どんな形であろうとも、私達は同じ人間なのですから。

私はこれまで、障がい者はより丁寧に扱うべき存在であるという、優しさの裏側にある差別意識を持ってきたかもしれません。それは今の社会にも言えることだと思っています。しかし、時には子供に戻って純粋な心で様々な人と平等に接していきたいと感じました。今は引っこしをしたため、前のマンションへ行く機会はほとんどなくなりましたが、もしもあの女性に会えたなら、心を改めてもう一度声をかけたいと思いました。